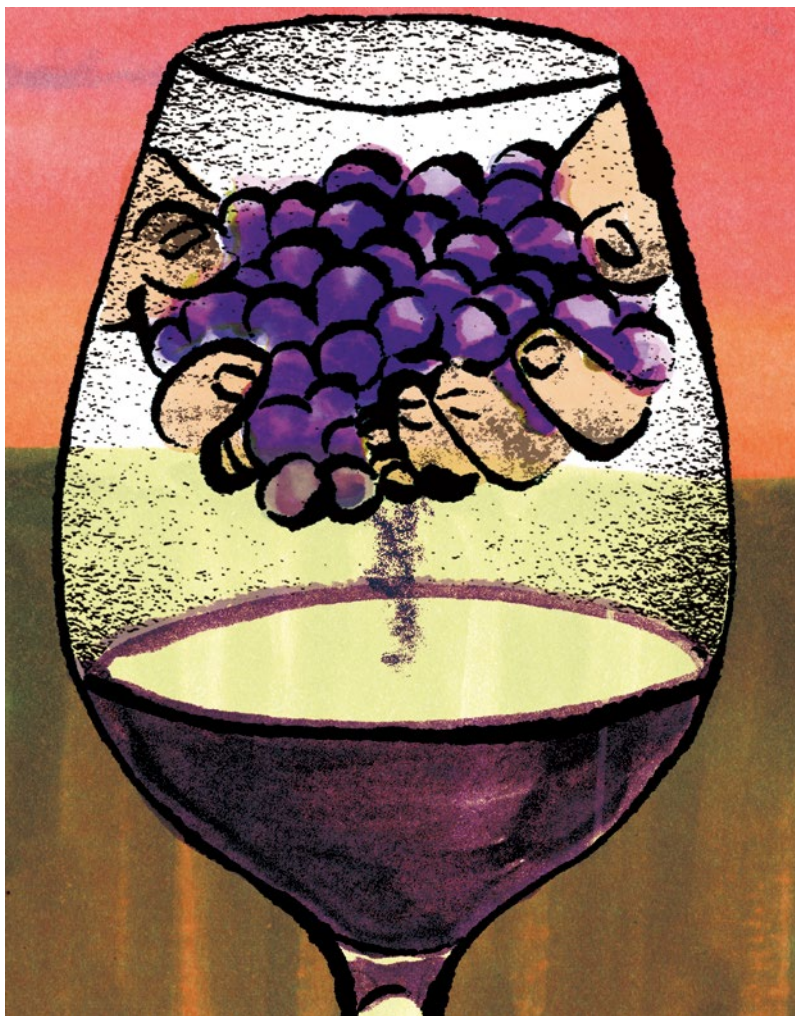


阿部容子

ワインに宿る
ストーリーを求めて

ワインはいつでもその故郷へと世界旅行に連れて行ってくれるし、思い出をたどるタイムマシンにもなる。今夜飲むワインは私をどこへ連れて行ってくれるのだろうか。

自体に優劣はなく、いつ飲むか、どこで飲むかという違いだけで、日々の生活に欠かせない、人生すべての場面に寄り添うものなのだ。

この経験から、旅にはワイナリー訪問が必須となった。ヨーロッパやアメリカ、もちろん日本国内も。やはりワインが造られる空気感、テロワールを実際に感じるのには大事だ。そしてどんな造り手に醸造されたか。ワインが持つ履歴書というか、ストーリーというべきか。それを知ることが私は好きなのだ。ワインを飲むということは、造り手の哲学に触れることなのだ。毎晩、夫とワインを飲むのだが、行ったことのあるワイナリーでは思い出話に花が咲く。ワインとともに見えた風景や食事、そして造り手たちとの会話……。

大のワイン好きの私が残念に思うのは、死ぬまでに、世界中のすべてのワインを飲めないということだ。ワインの種類が多いのは、ブドウや生産地、ヴィンテージ、そして何より造り手によって味が違うからだ。それはやはり、ワインとは「人が造りしもの」だからだと思う。

そう強く感じるようになったのは、フランス・ブルゴーニュ地方のワイナリー「ルロワ」を訪れてから。素晴らしいワイナリーへの訪問に、アジアの小娘が何しに来たと思われないように、文字通り私は背伸びをするよ

うに、さつそうとワイナリーに向かった。見たす限りのブドウ畑が広がり、出迎えてくれた醸造責任者は、小柄でチェックのシャツにオーバーオールを着た農家のおじさん。握手をする手はブドウをたくさん触るせいか爪は黒く染まり、ごつごつとした分厚い手。そして私の手を握る力はやさしい。肩肘張っていた私の緊張をほどくかのようにだった。「ワインの前では皆、1人の人間だ」と。薄暗いセラーに入ると、樽から直接、グラスにワインを注いでくれた。「ミュージニ」はすごく大人っぽいん

だと、『ジュヴェレ・シャンベルタン』は「この子は寝ていたのに起こされて怒っている」と、個性豊かなワインたちを自分の子どものようにやさしい言葉で表現してくれる。そして「1人で飲むなら、どのワイン?」「記念日に飲むなら?」と聞かれたり。ここではルロワというブランドではなく、ワインそのものと向き合うことを求められた。ワインは値段や評価よりも、自らが真剣に向き合っ



阿部容子(あべようこ)
ワイン教室「Abu Wine Atelier」主宰。東京生まれ。学習院大学法学部卒。ワインエキスパート資格を持ち、日本ソムリエ協会から優秀講師として認定されている。毎年、国内外のワイナリーを訪問し、フランスの「リヨンワインコンベンション」にテイスターとしても参加。現地の人との交流の経験に基づき、生活にワインをプラスすることで人生が豊かになるような、肩肘張らない自由なワインの楽しみ方を伝えている。ワイナリーを題材としたファンタジー小説「真実はワインの香りの中に」が好評発売中

APÉRITIF

3